

## 子ハンス・ホルバイン作《ホワイトホール・パレスの壁画》におけるヘンリー八世の足を広げて立つポーズに関する一考察

西 美弥子（国立新美術館）

子ハンス・ホルバイン(1497/98-1543)による《ホワイトホール・パレスの壁画》(1537)は、1698年の火災によって焼失したが、その様相は残されたオリジナルのカルトンの左半分と、レミーギウス・ファン・レームプトによる模写(1667)によって知られる。壁画の中でイギリス王、ヘンリー八世(1491-1547)は観者を直視する正面観の顔、豪華な衣装と装飾品を身にまとう堂々たる体躯、両足を広げ踏ん張るように立つポーズで描かれ、力強く威厳のある姿である。後にこの姿は彼の固有のイメージとして定着することとなった。中でも正面観の顔と、重心をどちらに傾けることもなく広げた足という特徴は同時代のいずれの王侯君主の肖像にもみられない独特の表現として知られている。

本研究はこれらの特徴のうち、足を広げて立つポーズに注目し、そこに込められた意図について新たな解釈を試みるものである。まず、このポーズのイメージソースとして15・16世紀に北方の国々で頻繁に制作された傭兵美術の存在を指摘する。騎士に代わる新たな戦力として登場した傭兵は、愛国心の象徴や理想的な戦士像の表象として、北方の画家達に好まれた題材であり、ホルバイン自身も渡英前のバーゼル時代に傭兵の姿を用いた作品を制作している。画家達はしばしば傭兵を足を広げたポーズによって表しており、ホルバインも例外ではなかった。このバーゼル時代の経験がホルバインの描くヘンリー八世の特徴的なポーズへと反映された可能性について言及する。

先行研究では当ポーズをとることによりヘンリー八世が「騎士」そして「皇帝」として描かれていると指摘されている。この見解はヘンリー八世統治期に行われた騎士道回帰と中世のインペリウムに基づくものであるが、本研究ではさらなる可能性としてダヴィデ王としてのヘンリー八世像が示唆されていることを明らかにしたい。王妃、キャサリン・オブ・アラゴン(1487-1536)との離婚問題を巡り、対立を深めたカトリック教会からの離脱以降、ヘンリー八世は教皇を始めとするいかなる精神的な仲介者も要することなく神から直接命を受けたとされるダヴィデ王を自身の定型と定め、己が姿がダヴィデ王として表現されることを好んだ。しかし、先行研究の中では《ホワイトホール・パレスの壁画》におけるヘンリー八世像がダヴィデ王と結びつけて論じられてはいない。当時はダヴィデ王もしばしば足を広げて立つポーズによって表現されてきたこと、ホルバイン自身もバーゼル時代にそのようなダヴィデ王を描いていたということから、当壁画のヘンリー八世像も同様の役割を担っているとの認識を示したい。最後に、ヘンリー八世の戦争王もしくは戦士としての表象の確立の根底に、足を広げて立つポーズがあったと考え、その過程について当壁画以外に表わされたヘンリー八世像への影響をも踏まえて検討する。